

博士論文（要約）

論文題目 日本古代木簡論

氏 名 馬 場 基

(2) 目次

序

- 1 木簡研究の視点
- 2 日本の木簡研究のあゆみ
- 3 本書の構成

第Ⅰ部 木簡の位相

第一章 荷札と荷物のかたるもの

はじめに

- 1 同文荷札の作成・装着と機能
- 2 伊豆国調荷札の作成と荷物
- 3 贅荷札・進上状と荷札の機能

おわりに

第二章 一行書きの隠岐国荷札

はじめに

- 1 例外的な隠岐国荷札
- 2 一行書き隠岐国木簡の特徴
- 3 一行書き隠岐国木簡のかたるもの

おわりに

第三章 文献資料からみた古代の塩

はじめに

- 1 都城出土塩荷札木簡と出土遺構
- 2 律令国家と塩

おわりに

第四章 二条大路出土京職進上木簡考

はじめに

- 1 造営・工事関係の木簡
- 2 鼠等進上木簡
- 3 槐花進上の木簡
- 4 内容不詳の木簡について

おわりに

第五章 平城京の鼠

はじめに

- 1 六国史にみえる鼠の傾向
- 2 正倉院文書の鼠
- 3 木簡にみえる鼠と平城京の都市化

おわりに

第六章 木簡を作る場面・使う場面・棄てる場面

はじめに

- 1 木簡作成と使用
- 2 題簽軸の使用と廃棄

おわりに

補論 難読木簡釈読の実例

はじめに

- 1 陸奥国からの贅荷札
- 2 麻生割鯨
- 3 年魚の木簡など

おわりに

第Ⅱ部 木簡の作法

第一章 木簡の世界

はじめに

- 1 木簡出土
- 2 木簡の検討
- 3 木簡の読み解き

おわりに

第二章 木簡の作法と一〇〇年の理由

はじめに

- 1 多面体・棒状木簡の再検討
- 2 韓国古代木簡文化と日本古代木簡

おわりに

第三章 埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘をめぐって

はじめに

- 1 稲荷山古墳出土鉄剣銘の特質
- 2 稲荷山古墳鉄剣の役割

おわりに

第四章 「木簡の作法」論から東アジア木簡学に迫るために

はじめに

- 1 「木簡の作法」の考え方
- 2 手続きとしての木簡
- 3 揭示・形状のメッセージ性
- 4 木簡と口頭伝達と新羅木簡の作法
- 5 木簡をいつ捨てるのか

おわりに

第五章 書写技術の伝播と日本文字文化の基層

はじめに

- 1 日本での文字の書き方
- 2 東アジアでの筆写運動技術

おわりに

第六章 日本古代木簡を中心にみた文字・文字筆記・身体技法

はじめに

- 1 木簡への文字筆記

2 身体技法と文字文化

おわりに

補論 資料学と史料学の境界

—— 初山明・佐藤信編『文献と遺物の境界—中国出土簡牘史料の生態的研究—』によせて

はじめに

- 1 第一部「調査篇」の概要と若干の意見
- 2 第二部「研究篇」の概要
- 3 第二部「研究篇」に関する若干の意見
- 4 本書の目指した方向性について

おわりに

結

あとがき

(3) 本文

本論文はすでに出版されており、全文公開ができませんので、書誌情報を記載します。

著 者：馬場 基

タイトル：『日本古代木簡論』

出 版 社：吉川弘文館

刊 行：2018 年 5 月 25 日

I S B N：9784642046473

判 型：A5

ページ数：360 ページ

(4) 参考文献一覧

○単行本

- 阿辻哲次『漢字の社会史』吉川弘文館、二〇一三
市大樹『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房、二〇一〇
井上和人『日本古代都城制の研究』吉川弘文館、二〇〇八
今泉隆雄『古代木簡の研究』吉川弘文館、一九九八
狩野久『日本古代の都城と国家』東京大学出版会、一九八四
狩野久『発掘文字が語る古代王権と列島社会』吉川弘文館、二〇一〇
川田順造『〈運ぶヒト〉の人類学』岩波書店、二〇一四
鬼頭清明『古代木簡の基礎的研究』塙書房、一九九三
黒田弘子『ミミヲキリハナヲソギ一片仮名書百姓申状論一』吉川弘文館、一九九五
栄原永遠男『正倉院文書入門』角川学芸出版、二〇一一
佐藤信『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、一九九七
佐藤信『出土文字資料の古代史』東京大学出版会、二〇〇二
新川登亀男『日本古代の儀礼と表現』吉川弘文館、一九九九
杉本一樹『日本古代文書の研究』吉川弘文館、二〇〇一
鈴木拓也『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八
関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館、一九六九
高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版、二〇〇〇
高橋一夫『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る』新泉社、二〇〇五
田淵実夫『筆』ものと人間の文化史 30、法政大学出版局、一九七八
寺崎保広『長屋王』吉川弘文館、一九九九
寺崎保広『古代日本の都城と木簡』吉川弘文館二〇〇六
東野治之『正倉院文書と木簡の研究』(塙書房、一九七七
東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房、一九八三
東野治之『長屋王家木簡の研究』塙書房、一九九六
東野治之『日本古代史料学』塙書房、二〇〇五
中村順昭『律令官人制と地域社会』吉川弘文館、二〇〇八
平川南『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三
廣野卓『食の万葉集』中央公論社、一九九八
広山堯道・広山謙介『日本古代の塩』雄山閣、二〇〇三
三上喜孝『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館、二〇一三
森公章『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館、二〇〇〇
山崎達雄『ごみとトイレの近代誌—絵葉書と新聞広告から読み解く—』彩流社、二〇一六
山中章『考古資料としての古代木簡』『日本古代都城の研究』柏書房、一九九七。
義江明子『日本古代系譜様式論』吉川弘文館、二〇〇〇
吉川敏子『氏と家の古代史』(塙書房、二〇一三)
渡辺晃宏『平城京一三〇〇年全検証』(柏書房、二〇一〇)。

○論集・辞典等

石塚晴通監修、高田智和・馬場基・横山詔一編『漢字字体史研究二 字体と漢字情報』勉誠出版、二〇一六

上田正昭・大塚初重監修、金井塚良一編『稻荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社、二〇〇一

工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、二〇〇九

国立歴史民俗博物館・平川南編『古代日本 文字の来た道』大修館書店、二〇〇五

坂梨隆三・月本雅幸編『放送大学教材 日本語の歴史』放送大学教育振興会、二〇〇一

角谷常子編『東アジア木簡学のために』汲古書院、二〇一四

朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』雄山閣、二〇〇七

奈良国立文化財研究所『長屋王家木簡・二条大路木簡を読む』奈良国立文化財研究所、二〇〇一

奈良文化財研究所編『塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所、二〇一三

奈良文化財研究所編『〈歴史の証人〉木簡を究める』奈良文化財研究所、二〇一五

木簡学会編『木簡から古代が見える』岩波書店、二〇一〇

榎山明・佐藤信編『文献と遺物の境界—中国出土簡牘史料の生態的研究—』六一書房、二〇一一

飯島春敬編『書道辞典』東京堂出版、一九七五

井垣清明他編『書の総合事典』柏書房、二〇一〇

吳惠霖原撰・高畑常信監訳『木簡手帖』木耳社、一九八二

太甫熙永編『篆書字典』国書刊行会、一九七八

渋谷敬三編『絵巻物による日本常民生活絵引』1～5、角川書店、一九六五～六八

○発掘調査報告等

奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所、一九七六

奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条三坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、一九九五

奈良文化財研究所編『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書』奈良文化財研究所、二〇〇七

奈良文化財研究所紀要『二〇〇三』奈良文化財研究所、二〇〇三

奈良文化財研究所編『奈良文化財研究所紀要 二〇〇九』奈良文化財研究所、二〇〇九

東京国立博物館編『保存修理報告書江田船山古墳出土 国宝 銀嵌銘大刀』東京国立博物館、一九九三

奈良国立文化財研究所編『平城宮木簡 一』奈良国立文化財研究所、一九六六

奈良国立文化財研究所編『平城宮木簡 二』奈良国立文化財研究所、一九七五

奈良文化財研究所編『平城京木簡 三 二条大路木簡一』奈良文化財研究所、二〇〇六

向日市教育委員会編『長岡京木簡 二 解説』向日市教育委員会、一九九三

信楽町教育委員会編『宮町遺跡出土木簡概報 二』信楽町教育委員会、二〇〇三

『静岡県史 資料編四 古代』（静岡県、一九八九年）による。

国立昌原文化財研究所編『韓国の古代木簡』国立昌原文化財研究所、二〇〇六

奈良文化財研究所編『評制下荷札木簡集成』奈良文化財研究所、二〇〇六
木簡学会編『日本古代木簡選』岩波書店、一九九〇
木簡学会編『日本古代木簡集成』東京大学出版会、二〇〇三

大石久敬著、大石慎三郎校訂『地方凡例録』近藤出版社、一九六九
菊池駿助編『徳川禁令考』吉川弘文館、一九三一
張大順『木簡千字文』木耳社、二〇〇三
日本隨筆大成編輯部編『日本隨筆大成 笈舍漫筆・萍花漫筆・園小説外集・園小説別集・八十翁
疇昔話・牟芸古雅志・雲萍雜志・閑なるあまり・画証録』（日本隨筆大成刊行会、一九二八）。

○論文

網野善彦「日本の文字社会の特質をめぐって」『列島の文化史』五、日本エディタースクール出版部、一九八八）。

今津勝紀「調庸墨書銘と荷札木簡」『日本史研究』三二三、一九八九）

弥永貞三「古代資料論—木簡」『岩波講座 日本歴史 二五』岩波書店、一九七六）

岸本雅敏「古代国家と塩の流通」（田中琢他編『古代史の論点 3 都市と工業と流通』小学館、一九九八）。

清水みき「告知札」『月刊考古学ジャーナル』三三九、一九九一）

杉本一樹「文書と題籤軸（報告要旨）」『木簡研究』二四、二〇〇二）

高島英之「題籤軸」（平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中章編『文字と古代日本Ⅰ 支配と文字』吉川弘文館、二〇〇四）

館野和己「平城京の役所と官人」（平野邦雄・鈴木靖民編『木簡が語る古代史 上』吉川弘文館、一九九六）

館野和己「若狭の贄と調」（小林昌二編『古代王権と交流 3 越と古代の北陸』名著出版、一九九六）

田良島哲「中世木札文書研究の現状と課題」『木簡研究』二五、二〇〇三）

寺崎保広「平城宮における下級官人の本貫地」『古代史と史料』私家版、二〇〇四）

東野治之「日本語論—漢字・漢文の受容と展開—」（坪井清足・平野邦雄編『新版古代の日本 1』角川書店、一九九三）

東野治之「長屋王家木簡の「御六世」」『国文学 教材と資料』四七一四、二〇〇二）

東野治之「巻頭言—情報化と松と檜—」『木簡研究』二四、二〇〇二）

友田那々美「古代荷札の平面形態に関する考察」『木簡研究』二五、二〇〇三）

中川あや「金属器の受容」（上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編『列島の古代史 5 専門技能と技術』岩波書店、二〇〇六）

西山要一「東アジアの古代象嵌銘大刀」『文化財学報』一七、一九九九）

馬場基「古代東アジア文明と日本古代社会の接触の多様性」（王維坤・宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』国際日本文化研究センター、二〇〇八）

馬場基「古代下級官人出勤日数実態調査」『日本歴史』七二九、二〇〇九）

馬場基「平城京という「都市」の環境」『歴史評論』七二八、二〇一〇）

樋口知志「『二条大路木簡』と古代の食料品貢進制度」『木簡研究』一三、一九九一）

樋口知志「荷札木簡から見た末端文書行政の実態」(奈良文化財研究所編『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所、二〇〇三)

平川南「榜示札の語るもの」『発見！古代のお触れ書き』大修館書店、二〇〇一)

北条朝彦「古代の題籤軸」(皆川完一編『古代中世史料学研究 上』吉川弘文館、一九九八)

吉川真司「税の貢進」(平川南他編『文字と古代日本 3 流通と文字』吉川弘文館、二〇〇五)

馬怡「中国古代書写方式探源」『文史』二〇一三年第三輯)

渡辺晃宏「二条大路木簡の内容」(奈良国立文化財研究所編『平城京 長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館、一九九一)

渡辺晃宏「平城宮跡出土の「籤引き札」」『日本歴史』七〇九、二〇〇七)。

渡辺晃宏「木簡から万葉の世紀を読む」(高岡市万葉歴史館叢書『奈良時代の歌びと』高岡市万葉歴史館、二〇〇八)

和田幸大「日本の中世書状における料紙の扱い方と執筆体勢に関する考察」『大学書道研究』八、二〇一五)

（５）論文の内容の要旨

論文題目 日本古代木簡論

氏 名 馬 場 基

本論文は、日本古代を中心とした木簡の史料学的分析を通じて、木簡の史料学的特徴を帰納的に明らかにし、木簡の分析に新たな視座を呈示するとともに、これらの分析から日本古代史・日本古代社会の解明、ひいては日本文化の基層的要素の抽出と分析を試みるものである。

この際、「木簡は、社会で、人間が利用した「道具」である」という視点を重視した。すなわち、木簡を作成し、機能を付与するのは「人間」であるから、木簡に「対する」人間側の「意識」「働きかけ」「認識・理解」こそ重要で、これらに木簡が内包する歴史情報が含まれている、と考えた。

そして、こ先学の提示した「書写の場」「木簡文化」および「仕事論」の視座を積極的に継受しつつ、「木簡の作法」という視点を提示した。

以下、部・章ごとに本論文で論じた内容をまとめる。

第Ⅰ部では、具体的な木簡の史料学的分析を行った。

第一章では、荷札（貢進物付札）木簡を対象として、「荷札と荷物の関係」という視点を軸に、具体的な利用状況の解明と歴史的意義づけを試みた。まず、同内容の木簡が複数（二点）出土する事例について、近世の貢納物に関する規定を参考にして、二点のうち一点は荷物の外に装着され、もう一点は中に封入されたと論じた。また、材の共通性等から、二点の木簡が同時に作成されていることを明らかにした。次に、伊豆国荷札木簡の「追記」の位置・内容に着目し、貢納物を準備するどの段階で木簡を作成し、装着したかという具体的な製作・利用状況を検討した。その結果、荷札木簡は帳簿（計帳歴名など）を引き写して作成された「帳簿の分身」であり、貢納物そのものの準備とは別作業で作成されたこと、そして帳簿の分身たる荷札木簡こそが、籍帳支配と現実社会とを繋ぐ役割を果たしていたと考えた。さらに、贅の木簡の分析を通じて、荷札が装着されない贅の存在を指摘した。

第二章・第三章では木簡にまつわる「例外」「ずれ」「違い」からその利用状況を検討した。第二章では、特徴的な形状・書式（杉材・〇三一形式・幅広で短め・割書）が指摘される隠岐国荷札木簡の例外的な木簡（広葉樹・一行書き・端正な文字）を確認した上で、例外の木簡の時期と品目に特徴があることを明らかにした。第三章「文献からみた古代の塩」では、塩の荷札木簡の整理を通じて、貢進国によって木簡の形状や同文荷札の分布に「違い」があること、遺構の年代観と塩荷札木簡の年紀が「ずれる」場合と「ずれない」場合がある＝都城での塩の保存期間に違いがあると想定されること、木簡に記された塩の貢進地には製塩遺跡が濃密に分布する場合と存在しない場合とがあるという「ずれ」や「違い」、一方都城では塩荷札と製塩土器が一緒に出土する例が見当たらないという「ずれ」を見いだした。これらから、都城にもたらされた塩は大きく三種類、①保存期間長、固形塩、製塩土器生産、籠で輸送、貢納物、荷札装着、若狭（新技術の大型土器で量産）、尾張と三河（従来からの技術で規模を拡大）、②保存期間短、散状塩、鉄釜利用生産か、籠で輸送、貢納物、荷札装着、周防、③製塩土器に詰めて輸送、高級品か、貢納品ではない、

荷札なし、大阪湾や紀淡海峡が主、という三種類の塩が存在し、①・②は国家的な塩であり、国家的な塩については、①は律令国家の「富の備蓄」のため、②は日常的な「富の利用」のため、と目的に応じて生産段階から管理していたであろうことを論じた。

第四章・第五章では、木簡の細かな観察と関連情報の融合による考察。第四章は、二条大路木簡中の京職進上木簡の、出土地点の変化（＝廃棄時期）・内容・穿孔（＝管理状況）を整理し、周辺の遺構変遷と照らし合わせて藤原麻呂邸・皇后宮職の活動の具体的状況を検討した。第五章では、木簡の検討中に生じた疑問（鼠がどの程度平城京内に棲息していたのか）について、正倉院文書・六国史等と合わせて検討し、鼠害の発生が平城京では比較的低調であるが、同時に一定数の棲息は確認できること、こうした状況から考えると「都市性」という点で平城京は平安京の段階とは異なる点を指摘した。

第六章では、木簡の作成・利用・廃棄のそれぞれの段階の事例に史料学的分析を加えた。作成の事例では、広葉樹の木簡は意図的に樹種が選択されたことを、都城出土の大宰府からの木簡と、史跡大宰府出土木簡の比較を中心に論じ、広葉樹選択の目的を端正な文字の書き込みと堅牢性に求めた。利用の事例では、長屋王家木簡中の一点（御田苅木簡）について、出土遺構の位置付け、長屋王家木簡の中での特異性、文字の割り付けの様相などを通じて「口上のひな形」である可能性を考えた。廃棄の事例では、題籤軸の軸部の長さに注目して、題籤軸は「文書の付札」であり「軸」は必須条件ではないことを指摘し、また軸部が完存しない場合の残存長と軸端部の状況、および出土状況の分析から、軸部に文書が巻き付けられたまま題籤部を折り取るという、文書の廃棄方法を想定した。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部での分析から、「道具としての木簡」「木簡の作法」という観点を提示し、日本の木簡の特徴や日本古代の文字継受・文字文化の様相について論じた。

第一章では平城宮・京出土木簡を中心に、出土状況とその史料的特徴を検討・整理した。木簡は平城宮・京各地から出土しているが、出土遺構を詳細に検討すると、出土点数が膨大な場合、建物の建て替えや移転など、何らかの場面・理由による集中投棄が背景に存在することを指摘した。また、木簡には一次史料として大きな強みがあるからこそ、出土遺構や伴出遺物との関係なども含めた総合的な分析・理解、個々の木簡に寄り添った詳細な観察が必要であることも論じた。

第二章では、新羅と百済の木簡にさまざまな相違点が目立ち、新羅と百済では別個の「木簡文化」を有していたと考えられることを指摘した。そして、「木簡文化」、すなわち木簡を道具として社会で利用できる条件（＝木簡利用の規則・慣習・技術等の共有やその前提となる木簡利用の必然性といった社会的条件）という視点から考えると、朝鮮半島南部で六世紀代に木簡利用が展開していたにもかかわらず、日本列島で木簡が爆発的に増えるのが七世紀後葉まで降ることは、古代日本列島で木簡を広汎に受容する社会的条件が未成熟であったことと対応し、また日本古代木簡が百済木簡に類似することは、百済滅亡に伴う百済遺民の流入が日本古代木簡文化形成に重要な役割を果たしたことを反映していると論じた。文字文化・木簡の社会への「広がり」を重視しつつ、木簡の背景に存在する社会・人・空間（書写の場など）の重要性を主張した。

第三章では、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣について、テキストとしての文字記載＝「銘文」と、物体・遺物としての媒体＝「鉄剣」の関係という視点からの分析を試みた。そして、通常の剣銘は刀剣そのものの説明（由緒や由来・吉祥句など）である中で、稲荷山古墳出

土鉄剣銘は個人の系譜や顕彰に重点が置かれており、きわめて異例な存在であり、その記載内容は剣銘よりもむしろ墓誌銘に普遍的にみられるもので、とくに書式の点もふまえると群馬県山ノ上碑がもっとも類似する点を論じた。

第四章は、記載内容の解釈だけでは説明しきれない木簡の事例を挙げて、そこに「木簡の利用者」を想定する必要性を論じた。木簡製作時や利用時には、木簡上に文字化・言語化して定着されていない（＝記載されていない）情報の伝達も内包させられており、木簡の「使い方」＝利用法にも何らかのルール・伝達力があつたと想定した。そして木簡という「道具」を取り巻くさまざまな総体を捉える概念として、広く社会で共有された「木簡の作法」を考えることが木簡の史料的分析に必須であり、また木簡を用いた研究にも有意義であることを論じた。

第五章・第六章では、木簡製作の最終場面である「文字を書く」部分に注目して、その特徴抽出を行った。絵画資料や日本中世史での研究成果から、日本中世初期に書写媒体を「手で持って」書く場合と「机に置いて」書く場合が存在すること、日本列島では独特の筆の持ち方が伝統的であることを指摘・確認し、それらが日本古代・中国晋代にまで遡る見通しを述べた。字形研究・書道史研究を援用しつつ、この二つの身体技法の存在こそ、二種類の仮名文字が生み出され、使い分けられつつ並存してきた理由であると考えた。また、晋代の古い文字筆記の身体技法——他の東アジア諸国では消滅した——の日本列島での温存から、考古学の成果を援用しつつ、日本列島の文化継受の特性を論じた。

補論では、初山明・佐藤信編『文献と遺物の境界—中国出土簡牘史料の生態的研究—』の内容をふまえ、簡牘・木簡の特徴や研究の方向性を論じた。簡牘・木簡研究でしばしば用いられる「ライフサイクル」という語や、同書で展開された「生態系」という表現に対し、簡牘・木簡は独自に繁殖・成長する「生物」ではなく、あくまでも人間が製作・利用する「道具」である点を強調し、人間を主体とし、木簡を客体たる一つの道具として捉える視点たる「木簡の作法」論を展開した。